

チョンチャヌ

## 鄭燦宇牧師追悼

七月のはじめ、庭のムグンファ（無窮花＝むくげ）が一輪咲きました。その白い花を見て、一年前に突然逝ってしまわれたあなたのことを思いました。

日ごとに数を増し、勢いを増すムグンファの前を通るたびに、あなたのことを思います。

あなたが日本に来られ、そして私たちが知り合ったのは今から六年前、あなたの二七歳の時でした。あなたは韓国と日本の間に立って、学びと働きを続けておられました。私たちはあなたと一緒に『日韓キリスト教関係史資料Ⅱ』の編集の仕事をしました。

資料集の仕事は困難なことがたくさんありました。マイクロフィルムから起こした、文字のつぶれた資料を読み取る、というようなこともたくさんありました。そのような細かい、目と神経を痛めるような作業を、あなたはこつこつとやってくれましたね。そして翻訳の上で出て来る疑問にも丁寧に答えて協力してくれました。あなたはとても優しく暖かい人で、ちょっとはにかむようなところがあって、あなたがいることでみんなの気持ちが和みました。あなたの静かな熱意は私たちの希望また力でした。

あなたが日本や日本のキリスト教のことを批判するのを、私は聞いた覚えがありません。しかしあなたがこの資料集の仕事を熱心にやってくれたのは、この資料集によって日本と韓国のキリスト教の関係が今までよりずっと明らかになって、それは痛みをとまなうものではあるけれども、歴史の事実を共有することで、韓国と日本の教会が本当に信仰の交わりができるようになる、そこから恵みが与えられると、信じて期待しておられたからでしょう。あなたの一番目のお子様の名前は、ウンギ（恩基）ちゃん、恵みの<sup>もとい</sup>基という意味でしたね。

それなのにあなたは、資料集刊行の二カ月前に、逝ってしまわれました。

あんなに元気だったあなたが、私より十以上も若かったあなたが、こんなに早く逝かれるとは。

あなたは請われて、在日滞日韓国人会衆のハンサラン教会の牧師をしておられました。一度私を説教に招いてくださったことがありましたね。その時あなたは、教会の人々がどんなに熱心に教会とあなたを支えてくれるかを話してくれましたね。それを聞きながら私は、あなたがどんなに心を込めて牧会しているかを感じました。日本の国は、立場の弱い外国人にとって住みにくい国です。韓国・朝鮮人に対する差別と偏見の強い国です。そんな中で在日の人々が教会をどんなに頼りにしているか、福音をどんなに切に求めているか。それを私はたった一回のハンサラン教会訪問で感じました。あなたは、この国で困難を負っている同胞のために福音を伝えようとして、精一杯の努力をしてこられたのだと思います。会衆の重荷をあなたが一緒に受けとめて、それがあなたのいのちを縮める原因のひとつとなったのだとしたら、その会衆である在日の人たちに重荷を負わせているのは日本人と日本社会、そして自分もまたその一員。あなたの余りにも早い死は私にも責任があると、そう思えてなりません。

いつか、富坂キリスト教センター関係の、重要な会議の講演の翻訳と一緒に検討したことがありましたね。直接会う時間がなかったので、電話で、三時間ほどかけて、韓国語と日本語のニュアンスと用法を一語一語確かめながら、限られた時間としては最善のものができたと一緒に喜びました。「これで、翻訳への疑問や批判が出て、こういう理由でこう訳したと説明できる！」

長い電話は疲れたけれども、共同の作業をこちよく感じました。

この先長く一緒に仕事ができると思っていたのに、何年も何十年も一緒に力を合せて歩いていけると思っていたのに、あなたはあまりにも早く逝ってしまわれました。いつでも話せると思っていたのに、あのこともこのこともそのことも話さないうちに、あなたは逝ってしまわれました。

「あなたを思ってわたしは悲しむ。  
兄弟ヨナタンよ、まことの喜び！」（サムエル記下 1：26）  
ダビデがヨナタンを悼んだ言葉は私の心です。

ふと<sup>キムソウォル</sup>金素月の詩の一節を思います。

粉々に砕けた名前よ！  
虚空の中にばらばらになった名前よ！呼んでも主人のない名前よ！  
……

悲しみに絶え入るまでに 呼ぶ  
悲しみに絶え入るまでに 呼ぶ（「招魂」）

こんな言葉の断片が私のうちにこだまします。

あなたの名前を歴史の中に刻んでおきたい。また私の歴史の中にも刻んでおきたい。  
あなた死を、あなたとの出会いを、決してむだにすまいと、そう思っています。

(1996.7.3)

富坂キリスト教センター 日韓キリスト教史研究会 主事  
聖公会神学院教員